



TITLE:

副腎腫瘍と考えられた有茎性肝細胞癌の1例

AUTHOR(S):

吉村, 一宏; 友岡, 義夫; 前田, 修; 細木, 茂; 黒田, 昌男;
三木, 恒治; 宇佐美, 道之; 古武, 敏彦

CITATION:

吉村, 一宏 ...[et al]. 副腎腫瘍と考えられた有茎性肝細胞癌の1例. 泌尿器科紀要 1989, 35(12): 2131-2133

ISSUE DATE:

1989-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/116773>

RIGHT:

副腎腫瘍と考えられた有茎性肝細胞癌の1例

大阪府立成人病センター泌尿器科 (部長: 古武敏彦)

吉村 一宏, 友岡 義夫, 前田 修, 細木 茂

黒田 昌男, 三木 恒治, 宇佐美道之, 古武 敏彦

A CASE OF EXOHEPATIC PEDUNCULATED HEPATOCELLULAR CARCINOMA SUSPECTED OF ADRENAL TUMOR

Kazuhiro YOSHIMURA, Yoshio TOMOOKA, Osamu MAEDA,

Shigeru SAIKI, Masao KURODA, Tsuneharu MIKI,

Michiyuki USAMI and TOSHIHIKO KOTAKE

From the Department of Urology, the Center for Adult Diseases, Osaka

A case of exohepatic pedunculated hepatocellular carcinoma that was clinically diagnosed as nonfunctioning adrenal tumor is reported. A 66-year-old man was admitted to our hospital for further examination of unstable angina pectoris. Abdominal echogram and CT scan revealed a large tumor in the right retroperitoneal space. Selective right renal arteriography demonstrated that the tumor was fed by the capsular branch of right renal artery and the right adrenal artery. Adrenal function was normal. Preoperative diagnosis of right nonfunctioning adrenal tumor was made. On operation we found that the tumor was pedunculated from the liver and adhered massively to both right kidney and vena cava. The tumor and right kidney were removed. A histopathological examination demonstrated well differentiated hepatocellular carcinoma (Edmondson's grade II type).

(Acta Urol. Jpn. 35: 2131-2133, 1989)

Key words: Exohepatic pedunculated hepatocellular carcinoma

緒 言

肝細胞癌のうち肝外性に発育し有茎性あるいは肝外発育型肝細胞癌と呼ばれているものは比較的稀である。最近、われわれは副腎腫瘍と考えられた肝外発育型有茎性肝細胞癌の1例を経験したので報告する。

症 例

患者: 66歳, 男性

主訴: 胸痛

家族歴・既往歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1988年8月5日, 胸痛が出現。不安定狭心症と診断され当センター内科入院した。腹部エコー, CTにて右後腹膜腫瘍を指摘され同年9月13日当科紹介された。

入院時現症: 身体所見に異常を認めなかった。

検査成績 赤沈: 1時間値 27 mm, 2時間値 61 mm。血液一般: RBC $445 \times 10^4/\text{mm}^3$, WBC 7,150/ mm^3 , Hb 13.6 g/dl, Ht 43.3%, platelet $20.8 \times 10^4/\text{mm}^3$ 。

血液化学: Na 138 mEq/l, K 4.2 mEq/l, Cl 109 mEq/l, Ca 9.3 mg/dl, iP 3.9 mg/dl, BUN 16 mg/dl, Crn 1.0 mg/dl, Uric Acid 6.8 mg/dl, TP 6.8 g/dl, Alb 4.1 g/dl, GOT 18 U/l, GTP 26 U/l, γ -GTP 40 U/l, LDH 112 U/l T.Bil 0.5 mg/dl。血清学的検査: HBs 抗原陰性, α -fetoprotein 陰性, CEA 陰性。内分泌学的検査: 血中 cortisol, renin, aldosterone, 尿中 17-KS, 17-OHCS, metanephthrine, VMA すべて正常範囲。

腹部超音波検査: 肝下面に接し, 分葉状に描出される径約 8 cm の腫瘍像が認められた。

X線学的検査 排泄性腎盂造影では右腎盂に軽度の変形を認め, 腹部 CT で右腎上極の腹側に enhance される腫瘍を認めた (Fig. 1)。選択的腎血管造影では腫瘍はおもに右腎動脈被膜枝および右副腎動脈により支配されており, これらの動脈は腫瘍により伸展され, その下方に淡い腫瘍陰影を認めた (Fig. 2)。大動脈造影では腹腔動脈枝による腫瘍血管はみられなかった。

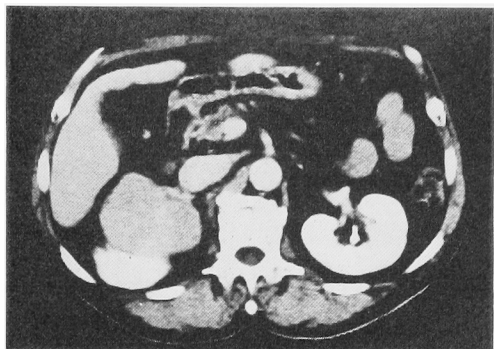


Fig. 1. CT scan showing a large tumor in the retroperitoneal space.

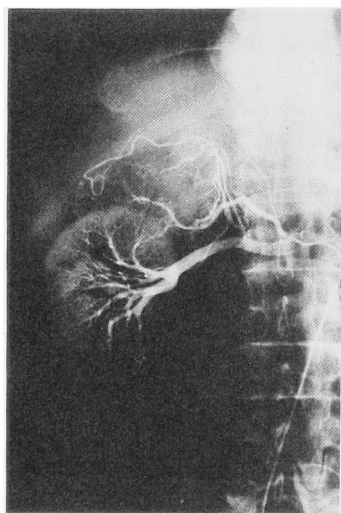


Fig. 2. Selective renal arteriography revealed tumor stain.

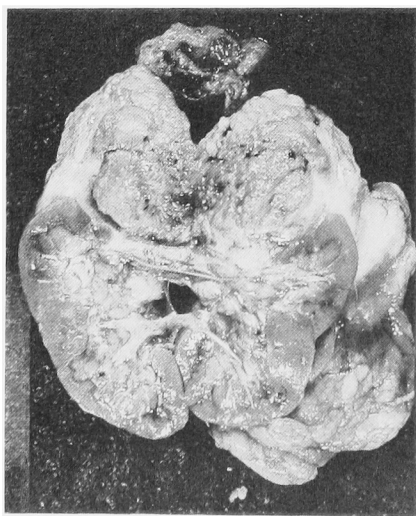


Fig. 3. Gross view of the removed specimen.

以上の所見より内分泌非活性型副腎腫瘍あるいは腎被膜腫瘍を疑い1988年10月12日、手術を施行した。腫瘍は肝および下大静脈と強く癒着し、また右腎と一塊となっており腫瘍のみの摘出は困難と判断し、腫瘍と右腎とを一塊として摘出した。摘出標本では腫瘍は7×5×4 cm, 充実性であり腎上極と強く癒着していた (Fig. 3)。右副腎は腫瘍により圧迫され引きのばされて存在していた。

病理組織学的には、大型で類円型の核をもつ腫瘍細胞がシート状充実性に配列した Edmondson II 型の肝細胞癌であり (Fig. 4)。肝細胞癌が肝外性に後腹膜へと発育し腫瘍を形成した症例であると考えられた。

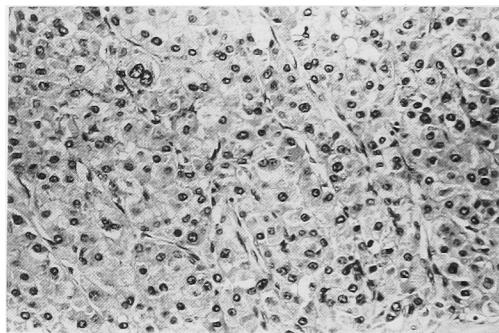


Fig. 4. Microscopic view; well differentiated hepatocellular carcinoma (Edmondson's grade II type) was noted.

術後経過は良好で現在まで腫瘍の再発、転移を認めず健在である。

考 察

肝外性に発育した肝細胞癌は欧米で数例、本邦で50例あまりの報告をみるにすぎない比較的稀な疾患であり、市川ら¹⁾は肝外発育型肝細胞癌を、I) ectopic growing type, II) pedunculated type, III) protrusive type に分類しており、自験例は後腹膜腔に発育した pedunculated type の肝外発育型肝細胞癌と考えられた。

西垣ら²⁾の報告によると、肝外発育型肝細胞癌のうち臨床的に肝細胞癌と診断されたものは72.9%でそのほとんどが CT および血管造影が診断の根拠となったとしている。

一般に肝細胞癌は肝動脈が栄養血管であり肝外性に肝細胞癌が発育した症例³⁻¹⁷⁾においても肝動脈に支配された腫瘍像がえられたという報告が多くみられる。自験例では CT および血管造影で積極的に肝細胞癌

を疑う所見は少なく,むしろ副腎あるいは腎被膜原発の腫瘍が考えられ術前診断は困難であった。しかし,肝細胞癌の側副血行路の一部として下横隔膜動脈,右腎動脈被膜枝が挙げられており¹⁸⁾,またこれらの動脈が肝外発育型肝細胞癌の栄養血管であった症例の報告もあり¹⁹⁾,内分泌非活性型副腎腫瘍を疑った場合,鑑別すべき疾患の一つであると考えられた。

治療としては外科的治療が主で,肝切除が小範囲ですむため切除率が高く一般の肝細胞癌に比べ予後も良好である。

結 語

副腎腫瘍と考えられた肝外発育型有茎性肝細胞癌の1例を若干の文献的考察を加えて報告した。

なお本論文の要旨は第126回日本泌尿器科学会関西地方会にて発表した。

文 献

- 市川 長, 今岡真義, 佐々木 洋, 石川 治, 大東弘明, 谷口健三, 岩永 剛, 石黒信吾, 和田昭: 肝外発育型肝細胞癌6例の検討—肝外発育型肝細胞癌の分類と外科治療—. 肝臓 **25**: 806-812, 1984
- 西垣 光, 阿部芳道, 堀居雄二, 掘土雅秀, 香川恵造, 奥野忠雄, 加島 敬, 瀧野辰郎, 野中雅彦, 弘中 武: 後腹膜腔に発育した肝外発育型肝細胞癌の1例. 京府医大誌 **95**: 189-195, 1986
- 山村卓也, 秋之敬一, 市原庄六, 三浦 健, 多田祐輔, 杉浦光雄, 和田達雄: 肝外性に発育し特異な血管支配を示したヘパトーマの1例. 日外会誌 **79**: 169, 1978
- 岡田隆夫, 太田茂樹, 森田修身, 白松幸爾, 室谷光三: 肝外発育を示した肝細胞癌の1例. 日内会誌 **68**: 670-671, 1979
- 中沢秀昭, 松本信子, 外山久太郎, 高橋唯郎, 柴田久雄, 富田友幸, 岡部治弥, 箕浦宏彦, 大宮東生, 佐々木憲一: 臨床的に肝外発育性 hepatoma と考えられた1例. 肝臓 **20**: 765, 1979
- 山崎芳生, 富川伸二, 佐々木秀俊, 中村 卓, 多田弘一, 岡林義弘, 竹内藤吉: 肝外性に発育した肝細胞癌の1例. 日外会誌 **81**: 178-179, 1980
- 二宮冬彦, 山口弦二郎, 丸山直人, 本告 仁, 稲永国勝, 長田英輔, 久保保彦, 谷川久一, 荒川正博: 肝外性発育を呈した肝細胞癌の1例. 肝臓 **21**: 1019, 1980
- 行徳 豊, 杉原 甫, 尾崎辰彦, 森 徹, 木下勇: 有茎性肝細胞癌の1剖検例. 癌の臨床 **26**: 92-96, 1980
- 原口増穂, 村上一生, 藤岡利生, 重岡健一郎, 北島醇二, 中村憲章, 牧山和也, 中口規彦, 原耕平: 肝外発育型肝細胞癌の1例. 日癌治 **15**: 168, 1980
- 今岡真義, 佐々木 洋, 松井征雄, 石川 治, 谷口健三, 岩永 剛, 青木行俊, 寺沢敏夫: 有茎性肝細胞癌の3例. 日消外会誌 **14**: 780, 1981
- 是永建雄, 三室 淳, 池上文詔, 沢崎博次, 高橋康雄, 多賀須幸男, 蜂屋順一, 石河利隆, 吉村克俊: 主として肝外性発育を示した巨大ヘパトーマ. 通信医学 **33**: 471-475, 1981
- 長浜真人, 松本俊治, 白田一誠, 桑原紀之, 福田芳郎, 水口国雄, 有山 襄: 肝外に著明な発育を示した肝細胞癌の1剖検例. 日病理会誌 **70**: 310, 1981
- 沢村隆也, 橋本 徹, 塩崎安子, 鮫島美子, 勝田吉重, 森井外吉: 肝外性発育を示した原発性肝癌の1例. 日内会誌 **70**: 1302, 1981
- 二村圭子, 田内胤泰, 遠山淳子, 石川 勉, 丹羽幸吉, 伴野辰雄, 水谷雅子, 牧野直樹, 三村三喜男, 水谷弘和, 鎌田憲子, 石垣武男, 今草倍庸行: 長期経過をたどったと考えられる有茎性肝癌の1例. 日医放線会誌 **41**: 810, 1981
- 堀江 裕, 吉田 裕, 今岡友紀, 周防武昭, 加藤誠一, 平山千里: 有茎性発育肝細胞癌の臨床的検討. 肝臓 **22**: 1219, 1981
- 荒川正博, 鹿毛政義, 磯村 正, 川野芳朗, 神代正道, 中島敏郎, 久保保彦: 肝外に巨大な腫瘤を形成したいわゆる有茎性肝細胞癌7例の検討. 肝臓 **23**: 1235, 1982
- 中山宏幸, 坪内博仁, 有沢速雄, 山下 宣, 山口幸一, 窪 蘭 修, 橋本修治, 川田卓郎, 小野二六一, 迫田晃郎: 肝外発育型肝癌の1例. 臨と研 **59**: 4046, 1982
- Charnsangavej C, Chuang VP, Wallace S, Soo C and Bowers T: Angiographic classification of hepatic arterial collaterals. Radiology **144**: 485-494, 1982
- 金丸洋史, 佐々木美晴, 西村治男, 村上隼夫, 梶原建熙, 吉田 修: 副腎腫瘍と思われた有茎性肝細胞癌の1例. 泌尿紀要 **30**: 253-258, 1984

(1989年3月28日受付)